

主 題：キリスト者と献身的な祈り①

聖書箇所：コロサイ人への手紙 4章2節

テーマ：献身的に祈る者として成長し続けていくために

きょうはコロサイ4：2を中心に考えてみたいと思います。その前に、一度この部分全体の流れを踏まえるために、2－6節をお読みしますので、それぞれよく聖書のことばに耳を傾けてみてください。

コロサイ4：2－6

「2 目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。:3 同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。:4 また、私がこの奥義を、当然語るべき語り方で、はっきり語れるように、祈ってください。:5 外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい。:6 あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります。」

さて、今回一緒に考えたいこと、それは祈りについてです。これからみことばの内容を見ていく前に、一度自分の歩みを振り返ってみてください。自分自身の祈りの生活はますます成長しているでしょうか？その祈りの姿は、みことばの教えている姿へと変えられているでしょうか？私たちは、信仰者にとって祈りが大切であるということ、何よりも祈りというものが神様から与えられたすばらしい特権であるということをよく知ってはいます。確かに私たちは、祈りを通して朝、昼、夜、どんな時も、どんな場所にあったとしても、神様を見上げ、喜びや賛美をささげることができます。また祈りを通して、私たちはどんな悲しみや苦しみの中にあろうとも主に身をゆだねることもできます。自分はいつもひとりではないのだと、主が自分自身の声に耳を傾けてくださっている、主が自分とともにいて助けを与え、守り導いてくださるのだと、祈りを通して、私たちは大きな平安を持って歩むことができます。また、加えて私たちはこの祈りが単にすばらしい特権であるだけでなく、それぞれの信仰にとって、その歩みにとって必要不可欠なもの、神様からの責任であるということもよく知ってはいます。

でもどうでしょう？正直になれば、そのすばらしさや特権や責任を知っているにもかかわらず、私たちは祈ることにおいて日々難しさや葛藤を覚えることが多々あるのです。忙しさに追われて、祈りをないがしろにしてしまうことがあります。祈りへの熱心が失われて、祈らないといけないから、ただ義務感だけに追われて、祈りは口にしているものの、同じことばをただ並べるだけのものになってしまうことがあります。またどんなに祈っていても、いつまでも答えが与えられなければ、次第に神様に対する確信が薄れて、喜んで祈ろうとしてない自分の姿をそこに見るかもしれません。祈ることは確かに難しさを伴うものです。かつての信仰者たちも同じでした。あのマルティン・ルターも、こんなことばを口にしていました。「祈りは最も困難な務めである。御言葉を宣べ伝えることや教会の他の公の働きを果たすことよりもずっと難しい。そして、これが祈ることが非常に稀である理由なのであろう。」と。ルターも難しさをわかっていました。でも同時に、彼はこうも言っていました。「私にはやるべきことがたくさんある。なので、最初の三時間は祈りに費やすことにしよう。」と。こうして、彼は祈ることと格闘していました。祈ることに喜びを見出し、祈ることに熱心に励んでいたのです。

私たちも同じです。祈りに関して私たち自身もますます成長し続けていかなければいけません。でもいったいどうすればそのように変わり続けることができるのでしょうか。私たちがきょうから見ていくこのコロサイの4章の最初の部分で、パウロは「祈り」と「伝道」について教えていました。そして、ここで、このコロサイの手紙の流れを思い出してみてください。パウロはコロサイの手紙の中で、1章と2章

前半部分で教理を語った後、3章からは十分なキリストによって新しくされた者の新しい生き方について語っていました。3：1－17まで信仰者個人としての歩みを、また教会での兄弟姉妹との関係に関わることをパウロは教えていました。そして18節から4：1までは家庭生活に関わることを教えていました。続いてこの4：2－6節では、外の人との関係、伝道に関わることを教えていたのです。徐々に広がっているのがわかりますか？3：1からひとりひとりの信仰者の新しくされた者としての歩みについて語り続けていたパウロは、個人だけではなく、兄弟姉妹との関係について触れた後、家庭生活について触れ、そして最後に外の人との関係、伝道に関して教えていたのです。十分なキリストが及ぼす影響というもの、十分なキリストによって救われた者の歩みというのは、個人だけではなく、教会の中だけではなく、家庭の中だけでもなく、外にも影響を及ぼすものだと言うのです。

○キリスト者のささげる祈り：祈りの姿勢と内容

そしてパウロはこの2－6節で、特に「伝道」という大切な働きを兄弟姉妹に語るのですけれども、その前に2－4節で、まず祈ることを求めています。すべての働きは祈ることから始まるということです。そしてこの教えの中に、私たち自身が今目標とするべき祈りの姿というものを見て取ることができそうです。みことばが教えている祈りの姿について、特に祈りの姿勢というものとその内容について一緒に考えてみましょう。

1. 祈りの姿勢 2節

祈りの姿勢を見るために、もう一度2節をよく見てください。「目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい」と書いていました。パウロはここに三つの姿勢を挙げていました。

1) たゆみなく祈る

まず一つ目に見て取れる姿勢は、「たゆみなく祈る」ことでした。恐らく皆さんの多くが持っている聖書の訳では、「たゆみなく祈りなさい」ということばが文の最後に登場していたかと思います。でも原文を見ると、語順が少し違いました。実はこの2節は、この「たゆみなく祈る」ということばで始まっているのです。つまりパウロはここで何よりもまず、祈ることを最初に強調して人々に命じていたのです。

また、ここで使われていたこの「たゆみなく」ということばは、もともと「ある方向に向かって」を表す“プロス”と「曲げない」、「最後まで耐える」を表す“カルテレオ”という二つのことばが一つになってできたことばでした。そしてここから、「献身的に続ける」とか「忍耐深く懸命に何かをし続ける」といった意味で用いられています。ある方向に向かって始めたことを曲げないのです。最後まで耐え続けるのです。これと同じことばをパウロは別の箇所でも用いていました。こちらの方がわかりやすいかもしれませんけども、ローマ12：12には「望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。」と訳されています。ですから、この「たゆみなく」ということばが持っているイメージを想像できますよね？やめるわけではないのです、一途に続けていく様子を表していたのです。加えて、特にここでこの「たゆみなく」という動詞には、継続を表す現在形が用いられていました。ということは、信仰者にとって祈ることは、たまにするものではないということです。気が向いた時にだけ祈るのでも、やることリストの一つとして、ただチェックをつけるためだけに祈るのでもありません。信仰者にとって祈るということは、まさに継続的なものでした。たゆみないものでした。それがその人物の生き方、その人物の歩みそのものだと言うのです。パウロがここで言わんとしていたことはもう明白でした。兄弟姉妹たちがあきらめてしまったり、やめたりすることなく、懸命にいつも忠実に祈り続けていくということ、そんな姿勢が求められていたのです。

もちろんこの祈りというのは、だれかと一緒に実際にことばに出して行うようなものもそうですし、ただひとり部屋にこもって心の中で行っているようなものも同じです。どんな時であろうが、どんな場所であろうが、私たちが神様の存在にいつも心を留めて、揺るぐことなく祈りをささげ続けていくのです。思い返せば、確かにそれこそがかつての信仰者たちの姿でもありました。例えばイエス様が目の前で

天に上っていく様子を見た後で、地上に残された弟子たちは何をしていました？使徒1：14にこう書いていました。「この人たちは（弟子たち）、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた。」と。ちなみにこの「祈りに専念していた」ということばも同じことばです。それだけではありません。例えば約束されていたとおりに聖霊が下って、教会が誕生した後、多くの弟子たちは集まって何をしていました？使徒2：42に書いていました。「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」と。これも同じことばが使われていました。また祈ることには、役割や立場というものも関係ありませんでした。教会のリーダーを担う存在に対しても、何を一番優先するようにと言われていたかと言うと、使徒6：4に「そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」と書いていました。ですから、教会は最初からそのように歩み続けていたのです。信仰者たちはたゆむことなく熱心に祈り続けていたのです。

では、今の私たちはどうでしょう？自分の祈りの生活を素直に振り返ってみる時、残念ながら祈ることを諦めてしまったり、それを忘れてたりしてしまう場面もあるでしょう。少し考えてみてください。いったいどうして私たちは、祈り続けることに難しさを覚えたり、それをしなかつたりするのでしょうか？時に余りにも忙しくて祈る時間がないと考えているのかもしれませんが。もしかしたら、結果がすぐに見られない、どんなに祈っても状況が一向に変わらないから祈っても仕方ないと思っているのかもしれませんが。もしかしたら、ほかにしたいことが数多くあって、それらに心を奪われているがゆえに、熱心に祈ること自体を望んでいないのかもしれませんが。また、もしかしたら祈りを、自分が困った状況に置かれた場合、何か問題や課題を抱えた場合にだけささげるものだと考えているのかもしれませんが。ほかにも挙げることはもちろんできます。ただ私たちはこうやって、祈れない理由をさまざまに持ち出してくることがあります。たゆみなく祈れないことを自分自身正当化しようとするのです。そんな弱さや頑なさを、私たちはみな抱えています。そして、そんな私たちに対してみことばは、たゆむことなく、絶えず祈りに励みなさいと、忘れないように何度も何度も命じているのです。

では、この点において私たちはどうすればさらに成長できるのでしょうか？主とそのみことばを愛している者として、ますます忠実に従っていくにはどうすればよいのでしょうか？もちろん、さまざまなことは言えます。でも、一つ鍵になるのは、私たち自身がイエス様の祈りの模範を覚え続けるということです。どういうことなのかと言うと、注目してほしいのはマルコ1：35です。その前に、この時の状況を思い返してみましょう。21節のところから描かれている状況をまとめていきます。ある安息日の日、イエス様は非常に長い一日を過ごされていました。会堂に入ったイエス様は人々に権威をもって教えていました。しかし、その教えの最中、会堂にいた汚れた霊に憑かれた人が叫んでその教えを妨げたのです。それが21-24節に書かれていました。そして、その人に対してイエス様は叱って言われていました。25節に「イエスは彼をしかって、「黙れ。この人から出て行け」と言われた。」と書いています。するとその結果、その汚れた霊は大声を上げて、その人から出ていきました。その光景を見た人たちは非常に驚いていたのです。次に、会堂での働きを終えたイエス様は、そのまますぐシモン・ペテロの家に向かったことが29節から記されています。するとそこでシモンのしゅうとめが病で熱を出して床に伏せていることを知らされるのです。そして、それを聞いたイエス様は彼女に近寄ってその病を癒されたことが29-31節に書かれていました。さて、その日の夕方、会堂で悪霊を追い出したことやしゅうとめの病が癒されたという知らせは、間違いなく人々の間に広まっていたのでしょう。だからこそ33節に「こうして町中の者が戸口に集まって来た」とあります。町中の人たちがイエス様のもとに多くの病人や悪霊に憑かれた者たちを連れて戸口に集まっていたのです。いったいどれほど多くの者たちが、シモンの家の前に集まっていたのでしょう。イエス様はここでも、そうやって自分のもとに連れて来られた病気にかかっている者を癒し、多くの悪霊を追い出されていたのです。

こうして一日が終わりました。一日忙しく、人々に仕えていたイエス様は、大きな疲れを覚えていました。次の日の朝くらいゆっくり休んでいても何らおかしくはなかったでしょう。でも実際に取った行動は違いました。35節にこんなふうに描かれています。35節「さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。」と。イエス様がしていたことは、祈ることでした。完全な神様であって、また完全な人としてこの地上に来られたその御子は、だれよりも祈りの必要性を、だれよりも祈りの重要性というものを覚えていたのです。しかもイエス様は、忙しさを言い訳にはしていませんでした。だれよりも懸命に、神様と人々のために働き、そして愛を示し続けたそのお方が次の日の朝も変わらず祈り続けていたのです。イエス様はほかにもたくさんのなすべき責任や務めも負っていました。続く38節を見ると、「イエスは彼らに言われた。「さあ、近くの別の村里へ行こう。そこにも福音を知らせよう。わたしは、そのために出て来たのだから。」」とされています。イエス様には福音を宣べ伝えていくという務めがあることをご自身ご存じでした。でも、どんな働きや務めを前にしたとしても、この方はまず何よりも祈り続けていたと言うのです。イエス様は問題とか課題とか、難しさを抱えたから祈っていたのでもありませんでした。前述のことを考えても、むしろいろいろな働きはうまく行っていたのです。でもこの方は良い時であろうが、悪い時であろうが、変わることなく祈り続けていたのです。

これが私たちの愛する主の残された模範でした。私たちが足跡にならっていくべき模範でした。イエス様は父なる神様との関係を心から愛していたからこそ、どんな時も父なる神様のみこころを祈り求め、そしてその力に拠り頼みながら最後まで歩み続けていたのです。そしてこの私たちの愛する主が、こんなにも祈りの必要性を覚えていたのであれば、私たちはどんなに祈らなければならないのでしょうか？かつてJ・Cライルもこの点に関して、次のことばを残していました。「私たちは個人的な祈りの計り知れない重要性を見なければなりません。『聖であり、罪のない、汚れのない、罪人からかけ離れた者』であった方が、絶えず祈っておられたのであれば、弱さに苛まれる私たちはどれほど祈らなければならないのでしょうか？もし、この方が強い叫びと涙をもって願いを捧げることが必要であると感じたのなら、日々様々なことで罪を犯す私たちはどれほどこれを必要とするのでしょうか？」と。知識としては当然のことのように知っているかもしれませんが、でも、私たちは自分自身のこととして、いつも覚えておかなければならないのです。私たちは神様の力や助けなしでは何もできないということです。でも同時に、私たちはどんな時も祈りを通して、偉大な神様に拠り頼み続けることができるということです。だからこそ改めて問いかけてみてください。日々の歩みにおいて、どれほど私たちは祈りをもって神様に拠り頼み続けようとしているのでしょうか？たゆみなく祈ること、それが一つ目の祈りの姿勢でした。

2) 目をさまして祈る

続けて二つ目に見て取れる姿勢は、目をさまして祈ることでした。コロサイ4：2に「目をさまして」と書いていました。ここで出てきていた「目をさまして」ということばには、文字どおり、「眠らないように目をさましている」という意味も含まれています。でも同時に、このことばはより広い意味で「目をさまして警戒を怠らない」とか、「危険や緊急事態に備える」といった意味をも表していました。まるで町を取り囲んでいる城壁の上に立って、何か怪しいものがないか、敵がないか、そのことにいつも細心の注意を払っている見張りのように、パウロは兄弟姉妹たちがどんな時も注意を怠らずに目をさまして祈っているようにと訴えていたのです。では、そもそもいったい何に対して注意を払うことが求められるのでしょうか、信仰者は常にどんなものに注意をしている必要があるのでしょうか。聖書を見てみれば、その幾つかの例を見て取ることができます。

a) イエス・キリストの再臨

例えばその一つは、イエス・キリストの再臨でした。今、見た「目をさまして」という同じことばが、マタイ24：42-44にも使われています。こんなふうに書かれていたのです。「:42 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。:43 しかし、このことは知ってお

きなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。:44 だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」この「目をさましていなさい」、また「目を見張っていたでしょうし」の二つは、同じことばが使われています。もう当たり前のように聞こえるかもしれませんが、でも、泥棒がいつ自分の家にやって来るのかということ、例えば私たちが知っていたとすれば、絶対に眠ったりはしないでしょ。確実に捕まえるための備えをして、待ち構えるはず。そしてそれと同じように、イエス様が必ず再び帰って来られるということを知っている者たちは、そのための準備をしっかりとしている必要があると言うのです。

私たちが、きょう主が帰って来ることを知っていたら、私たちの行動は多分変わるでしょう。言われていることはそういうことです。きょう主が帰って来るかもしれない、明日主が帰って来るかもしれないと、その日が刻一刻と近づいていることを正しく覚えているのであれば、いつも注意を払ってその日がいつ来てもいいように、その日が来た時に絶対に恥じ入ることがないように、慎み深く歩もうとすることです。ですから、イエス・キリストの再臨に対して、私たちが注意を払うということがみことばから見て取れることでした。

b) 霊的な敵の存在

でも、それだけではありません。それに加えて、例えばほかにも見られるのは、霊的な敵の存在でした。こういったものにも注意を払う必要があるのです。ペテロも、今私たちが見たこの「目をさまして」ということばを同じように使って、I ペテロ 5 : 8 でこんなふうに言っていました。「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」と。みことばが教えていたことは明白でした。敵である悪魔は今も変わらずにいろいろな方法で私たちを誘惑しようと、わなにかけようと、罪を犯させようと熱心に働いているということです。「食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回って」ということです。聖書は何も空想の話をしていてのではありません。例え私たちの目に見えなかったとしても、敵との戦いは、実際の問題として、現実の問題として存在していると言うのです。よくご存じのように、敵であるサタンは初めからずっと神様に逆らい続けています。自分自身が最後には滅ぼされるということを知っているからこそ、より多くの人たちを道連れにしようと熱心に働き続けているのです。そんなサタンが用いる嘘や偽り、策略というものは、当然、非常にずる賢く巧妙なものでしょう。II コリント 11 : 14 にも「しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。」と書いていました。だとしたら、すべての信仰者は注意している必要があるということです。眠っているのではなくて、敵が存在している以上、私たちはいつも目をさまして警戒している必要があると言うのです。ですから、イエス・キリストの再臨、そして霊的な敵の存在に対して注意を払うことが必要でした。

c) 私たち自身の持つ肉の弱さ

そしてもう一つだけ付け加えるとしたら、私たち自身の持つ肉の弱さでした。イエス様はこんなことばを弟子たちに言われています。ここでも同じことばが使われていますけれども、マタイ 26 : 40-41 に「:40 ……「あなたがたは、そんなに、一時間でも、わたしといっしょに目をさましていることができなかつたのか。:41 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」」と書いていました。この場面、皆さんもよく覚えていると思います。十字架につけられる前日の夜、ゲッセマネの園に弟子たちと一緒にやって来られたイエス様は、大きな苦しみを目の前にして、イエス様は変わらずに祈りをささげていたのです。でも、弟子たちはどうだったかと言うと、繰り返し眠っていました。悲しみもだえながら祈っているイエス様のかたわらで起きていられなかつたのです。まさにイエス様が彼らに言われていたとおりでした。例え心は燃えていたとしても、肉体は弱いものでした。

そしてこれは今の私たちも同じです。救われている者であろうとも注意深くいなければ、いつも気をつけていなければ、さまざまな誘惑や罪に陥ってしまう弱さを、危険性をみな持っていると言うのです。だからこそ、目をさましている必要がありました。たゆみなく祈り続けていることが弱い私たちにとっては欠かせないことでした。ジャン・カルヴァンも次のように述べています。「(誘惑に) 抵抗する方法は、自分の力や忍耐力に頼って勇気を引き出すことではなく、逆に自分の弱さを確信して、主に武器と力を求めることであることに注目しなければならない。したがって、私たちの見張りも、祈りなしには何の役にも立たないのだ。」と。信仰者は、少なくともキリストの再臨、危険な敵の存在、自分自身の肉の弱さに対してどんな時も注意を払って祈り続けていることが大切でした。必ずやって来る将来の約束というもの、そして今の私たちの歩みにおける現実の霊的な戦いというものを忘れて眠ってはいけませんと、教えられていたのです。

改めて考えてみてください。私たちは日々の生活の中であって、目をさまして祈っているのでしょうか？それとも本来目を留めるべき現実を忘れて、それ以外の別の何かに心がとらわれ続けているのでしょうか？一つ言えるのは、私たちは自分が注意とか関心を払っていないものに対して、気をつけて備えをすることはしないということです。災害などが起きた時、ニュースを見ていると、もしこんな大きな地震が来ることをあらかじめ知っていたら、しっかりと準備をしていたのに、こんなことばをよく耳にします。もっとちゃんと関心を払って備えをしておけばよかったと。問われるのは、みことばが教えている約束や警告を知っている私たちが、いったい何に注意を払っているのかということです。キリストが必ずやって来ること、危険な敵が存在しているということ、自分自身が気をつけていないと罪に陥ってしまうということがみことばからはっきりと教えられている私たちが、いったい今どのようなものに心を留めて祈っているのかということです。これは別に私たちが日々の歩みの中で覚えるさまざまな物質的な必要を祈ってはいけないという話ではありません。そのようなものもちろん祈りにささげることができません。それも感謝なことです。でも、もし私たちの祈りがこの世のことにのみとらわれているのであれば、よく自分自身に問いかけてみてください。果たして自分は今、目をさまして祈っているのだろうか。みことばが教えている揺るがない事実を、本当に自分は自分のこととして信じているのだろうか。忘れてはいけません。救われた私たちはみな、今まさに霊的な戦いの真ただ中に置かれているということです。神様の栄光を現すために、罪や誘惑と日々格闘しながら、この方にお会いするその日まで喜ばれることを熱心に追い求め続けていこうとするのです。それが私たちの歩みでした。

そして、そのために必要となるべきは、自分の知恵や力ではありませんでした。エペソ6：12-13に「:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。:13 ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。」と書いています。弱い私たちがこの格闘において自分自身に頼ることなどできません。でも私たちは神様の助けをどんな時も祈り求め続けることができるのです。神様の武具を身につけながら歩いていくことができるのです。そしてそれができるのであれば、改めて問いかけてみてください。日々の歩みの中において、どれほど私たちは自分の置かれている状況を正しく覚えて、目をさまして歩んでいるのでしょうか？目をさまして祈ること、それが二つ目の祈りの姿勢でした。

3) 感謝しながら祈る

そして最後三つ目に見て取れる姿勢は、感謝しながら祈ることでした。同じ2節に「感謝をもって」と書いていました。パウロはこの手紙だけでも、繰り返し何度も「感謝」ということについて口にしています。パウロは最初からずっと感謝ということをお口にしていたのです。例えば1：3であいさつをする時にパウロは「私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。」と言っていました。次に2：7を見ると、「キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられた

とおり信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。」と、また3：15－17の3節それぞれの最後に、繰り返し「感謝」ということばが言われていました。「感謝の心を持つ人になりなさい」、「感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい」、「主によって父なる神に感謝しなさい」と。こうしてパウロは自分自身がいつも感謝を持って祈りをささげ続けていたからこそ、ほかの兄弟姉妹に対しても同じように、神様に対して感謝を持って祈り続けてくださいと訴えることができました。

でも、どうしてパウロはそもそもこんなにも感謝することができたのでしょうか？いったいなぜローマの獄中にいた当の本人が、いつも感謝にあふれた祈りをささげることができたのでしょうか。それは、パウロが、神様がいったいだれなのかを正しく覚え、その神様がすべてのうちに今もなお変わらずに働いておられること、また、キリストがいったいだれなのかを正しく覚え、そのキリストが成し遂げたことを覚えていたからでした。いま一度考えてみてください。私たちは時に、神様が何をなされたのかということ、どのように今働いているのかということをおぼえてしまうことがあります。でも、パウロはそのことを覚え続けていました。このコロサイの手紙を見ても明らかです。例えばこのコロサイの手紙の内容を思い出してみてください。パウロはいったいどんなことに心を留め続けていたのでしょうか？これも全部見られませんが、1章だけ見てみると、1：4には何を心に留めて感謝しています？パウロは兄弟姉妹のうちに神様が働いてキリスト・イエスに対する信仰とほかの聖徒に対する愛が生まれているということを知って感謝していました。1：14を見てみれば、兄弟姉妹のうちに神様が働いて、キリストのうちにあって贖いが、キリストのうちにあって罪の赦しが得られるということを知っていました。1：20でも、御子が十字架の血によって平和を作ってくださいましたこと、兄弟姉妹を神様と和解させてくださったことを知っていました。22節を見てみれば、そんな兄弟姉妹たちがキリストのうちにあって、聖く、傷なく非難されるところのない者として、御前に立つことができるようになったということを知っていました。1章だけを見ても、パウロは真理に心を留め続けていたのです。神様が何をなされたのか、神様が今何をなしているのか、そして神様がこれから何をなされるのかということ、ほかにも挙げれば切りがありませんけれども、どんな時も変わらずに働かれる神様やキリストのみわざを目の当たりにし続けていたのです。

そして、その神様に対する強い確信というものが彼のうちに絶え間ない喜びを、彼のうちに絶え間ない感謝というものを生み出していたのです。自分を罪から救い出してくださいましたその神様は、今も変わらずにほかの人をも救われて、変わらず聖め続けておられると。確かにこの方は昔も今も、そしてこの先もすべてにおいて働き続けておられると。私たち自身、いろいろな場面で感謝を容易に失ってしまうことがあります。それぞれの大きな困難に直面して状況が変わらなかった場合、不安や不満にあふれているかもしれません。余りにも厳しい問題が降りかかってくれば、喜びや希望さえ失いそうになってしまうこともあるかもしれません。でも、果たしてそのような状況に私たちが置かれた時、その状況というのは、神様の御手から外れて起きていることなのでしょうか？一向に変わらないその状態の中であって、神様も何もせず休んでおられるのでしょうか？私たちにはどうすることもできない状況は、主権者であられる神様にとっても想定外で、手に負えない問題となっているのでしょうか？そうではないということです。この神様は、変わらずにすべてを支配しておられるお方でした。私たちが生まれるよりも遙か昔から、この世界の最初から存在するその神様は、すべてのことをご自身のみこころの時に、ご自身の思いのままに成し遂げられ続けてきたのです。すべてのことは、神様の御手のうちで起こっているに過ぎないのです。確かに私たちにはそう感じられないことは多々あります。でもみことばを見るのであれば、すべての主権者であられる神様は、いつも働いていてくださるのです。だからこそ大切なのは、私たち自身がどう考えるのか、どう思うのかでも、物事を自分の思いどおりにどうできるのかでもありません。私たちはただへりくだって、すべての支配者であられる方に身をゆだねるのです。あなただけがすべて

において働いておられるお方です。そう信じて、そう信頼して祈り続けることです。そしてその祈りのうちにこそ感謝はあふれてくるのです。

改めて問いかけてみてください。日々の歩みにおいて、私たちはどれほど神様に感謝しているでしょうか？昔も今も、そしてこの先も変わることなく、忠実にみわざを成し遂げられる神様にあって、皆さんはどんな喜びを見出し続けて歩んでいるのでしょうか？パウロはどんな時も感謝を持って、ますます祈り続けていました。ほかのだれでもない、生きて働いておられる神様を目の当たりにする時に、神様が過去どのようにして働かれたのか、神様が今どのようにして働かれているのか、そして神様がどのようにして働くという約束を覚えた時に、この神様に信頼し続けていたのです。そしてその神様の偉大さを、その神様の主権を覚えていたからこそ、パウロはローマの獄中でもこのように口にすることができました。ピリピ4：6－7で「:6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」と。パウロはこの神様に向かって祈りをささげ続けていました。確信を覚え続けていたのです。これは、今の私たちも同じようにして持てる確信だということです。感謝なことに、私たちも今、同じ神様に祈りをささげ続けることができます。忘れてはいけません。すべてを思いのままに支配されておられる主権者はただひとりです。そしてそれは私たちではありません。私たちひとりひとりに取れるふさわしい姿勢、それはただこの方の前に心からへりくだって、拠り頼み続けることです。目をさまして、感謝しながら、たゆみなく祈り続けていくことです。そのような祈りをささげる者として、今週もともに歩み続けていきましょう。